

コーブランド（1900～1990）／「ロデオ」からカウボーイの休日

才人コーブランドの華やかなサウンドが開演を彩る。1942 年作曲の「ロデオ」は、村一番のカウボーイに夢中になったお嬢さんのドラマティックな人生を描く。

アンダーソン（1908～1975）／タイプライター

19 世紀から 20 世紀前半の事務機器タイプライターは、今この曲で有名だ。1950 年にボストン・ポップスで初演された。

アンダーソン（1908～1975）編曲／マクドナルドじいさんは農場を持っていた

このメロディを知らぬ者は、いない。（マクドナルドじいさんの）イー・アイ・イー・アイ・オー。E-I-E-I-O！ アメリカ民謡も粹なオーケストラ曲に。

コーブランド（1900～1990）／バレエ音楽「アパラチアの春」からシンプル・ギフト

リリックな調べ、祈りの情趣に抱かれる。バレエの舞台は 19 世紀のペンシルベニア、開拓民による祝宴や生き様が描かれている。1944 年秋、マーサ・グレアム・バレエによって初演された。「シンプル・ギフト」はプロテスタントの讚美歌に基づく。

ラフマニノフ（1873～1943）／パガニーニの主題による狂詩曲 Op.43（抜粋）

ロシアン・ロマンに抱かれる。イ短調の序奏と 24 の変奏から成る。ピアノとオーケストラの対話、対峙が客席を捉えて離さない。主題は、パガニーニの無伴奏ヴァイオリンのための 24 のカプリス（奇想曲）のフィナーレ。多くの作曲家を魅了した主題である。実は主題の音を並び替えた、甘く切ない第 18 変奏が有名だ。

ジョン・ウィリアムズ（1932～）／雅の鐘

皇太子殿下と皇太子妃殿下のご成婚を寿ぐ音楽として知られる。

ジョン・ウィリアムズは当初、日本の寺院の鐘の音から靈感を受け、金管楽器と打楽器のために SOUND THE BELLS! を作曲。これをボストン・ポップス・エスプラネード・オーケストラと日本を訪れた 1993 年に編曲した。ブラス・ファン定番の名曲だ。

コルンゴルト（1897～1957）／映画「嵐の青春」から

初めて聴いたとしても、初めての気がしない曲かも知れない。1920 年代のウィーンを席卷した天才作曲家エーリヒ・ウォルフガング・コルンゴルトは、1930 年代半ば以降、ハリウッドをベースに映画音楽のスペシャリストとして名声を博す。栄えあるオスカー（アカデミー賞）も受賞した。第 2 次大戦後はウィーン音楽界への復帰を試みるも、時代は、ワーグナー風のライトモチーフを駆使した壮麗な音楽を書くコルンゴルトに味方しなかった。代表作はハイフェッツのソロで初演され、アルマ・マラー＝ヴェルフェルに献呈されたヴァイオリン協奏曲（1945 年作曲）。ケルンとハンブルクで同時初演され、ウィーン宮廷歌劇場でも賞賛を博したオペラ「死の都」（1920 年）。クライスラーの愛奏曲でもあった組曲「空騒ぎ」など。今日は、レーガン元アメリカ大統領も出演した映画「嵐の青春」のテーマを。選曲の理由は演奏で明らかになる。

ジョン・ウィリアムズ (1932～) / 映画「スター・ウォーズ」からメイン・タイトル、アステロイド・フィールド
「スター・ウォーズ」「未知との遭遇」「E・T」「インディアナ (インディ) ジョーンズ」「フック」「ハリー・ポッター」「ジュラシック・パーク」「スーパーマン」「SAYURI」「シンドラーのリスト」(年代順にあらず) ……
音楽はすべてジョン・ウィリアムズである。

1970 年代後半から愛されているメイン・タイトルと「エピソード 5/帝国の逆襲」(1980) よりアステロイド・フィールドを。

ジョン・ケージ (1912～1992) / 4 分 33 秒

指揮者とオーケストラの立ち居振る舞いに注目したい。

不確定性の音楽、偶然性の導入、図形楽譜の考案、あるいはプリペアド・ピアノの創案などがキーワードとなるアメリカの鬼才ジョン・ケージが、1952 年に発表した「作品」を「聴く」。

第 1 楽章 Tacet、第 2 楽章 Tacet、第 3 楽章 Tacet という構成。楽章を通して休みという意味の Tacet は、イタリア語読みでタチェット、フランス語読みでタセツト。

ドヴォルザーク (1841～1904) /

チェロ協奏曲 短調 Op.104 から第 1 楽章

ボヘミア (チェコ中西部) 出身のドヴォルザークが、超破格の待遇でニューヨークのナショナル音楽院の院長に招かれたのは 1892 年秋のこと。51 歳だった。

新生活が軌道に乗り始めた頃、ドヴォルザークは黒人霊歌やネイティブ・アメリカンの踊り、さらに「非西欧」調の 5 音音階や自然短音階によるアメリカ民謡に興味を抱く。

故郷ボヘミアの音楽との運命的な近似性に驚いたというべきか。付点音符やシンクペーションのリズムを多用した世紀転換期のアメリカ音楽は、なるほど長短・短長のリズムから成るボヘミア舞曲と、どこかで通じているかのよう。

当時の名演奏家との交友 (いろいろあったけれども) から育まれたチェロ協奏曲は 1896 年 3 月、ロンドンで初演された。

ドヴォルザーク (1841～1904) /

交響曲第 9 番 短調 作品 95「新世界より」から第 4 楽章

初演は 1893 年 12 月、カーネギーホール。ボックス席にいた作曲家は満場の歓呼に応えたという。

ドヴォルザークは無類の鉄道好きだった。鉄ちゃんである。第 4 楽章冒頭の動機を、蒸気機関車の加速から着想した可能性だって、なくはない。

第 3 楽章までの動機が回帰する第 4 楽章のクライマックス部も私たちが熱くする。この部分、黎明期のメトロポリタン・オペラでワーグナーに熱狂していた当時のワグネリアンを大いに喜ばせたのではないだろうか。音楽は最後、彼方へと消えゆく。

奥田佳道